県道美篶・箕輪線拡幅工事事業

－埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書（第Ⅱ次）－

辻西幅遺跡

1997. 3

伊那建設事務所
伊那市教育委員会

県道美篶・箕輪線拡幅工事事業

－埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書　(第II次)－

辻西幅遺跡

1997. 3

伊那建設事務所
伊那市教育委員会

序

平安時代前期頃に「弓良郷」と呼ばれる集落が発生して以来、その支配体制の変遷はあったが、現在に至るまで千年余の長き間連綿として、集落の営みがあることは驚嘆に値するものであります。このことは常に、故郷を愛し求めてやまなかった先人達の努力の賜物であり、頭の下がる思いです。現在、手良地区内で確認された古代の遺跡は十数ヵ所余りで、そこから検出する遺構・遺物を実見すると、当時の人々の生活実態を感じ取ることができます。

近年、増加傾向にある様々な開発事業に伴い、古代を中心とした発掘調査は数を増し、蓄積されたデーターは計り知れないものになってまいりました。ただ、これと同時に多くの遺跡が消滅の一途をたどっている事象に接し、開発と埋蔵文化財保存との調和を如何にして保っていくかの方策を講ずるのは、我々、現代に生きる者の責務であると考えております。

さて、今回、県道美篶・箕輪線拡幅工事事業に伴う本遺跡の発掘調査が実施され、平安時代の遺物がある程度まとまって出土しました。ここにその成果を報告することにより、これからの歴史研究の一助としていただければ幸いに存じます。

末筆ではございますが、調査にご協力いただいた関係諸機関をはじめ、多くの方々に謝意を表すると共に、今後とも市民の皆様の文化財に対する一層のご理解、ご協力を賜わりますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成９年３月

伊那市教育委員会

教育長　保　科　恭　治

例　言

1．本書は、平成８年度に実施した県道美篤・箕輪線拡幅工事事業、正確には緊急地方道路整備事業（A）伊那市手良辻地区埋蔵文化財包蔵地（辻西幅遺跡）発掘調査委託業務緊急発掘調査報告書である。調査自体は平成６年度に引き続いた第Ⅱ次調査となる。

2．この緊急発掘調査は伊那建設事務所長の委託により伊那市教育委員会が市内遺跡発掘調査団（辻西幅遺跡）を編成し、この調査団に事業を委託して実施した。

3．本調査は、平成８年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

4．本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野良一　　飯塚政美　　松島信幸　　寺平　宏

◎図版作製者

・遺構及び地形実測図　　友野良一　　飯塚政美

・拓　　影　　友野良一　　飯塚政美

・土器・陶器実測図　　友野良一　　飯塚政美

◎写真撮影者

・発掘及び遺構　　友野良一　　飯塚政美

・遺　　物　　友野良一　　飯塚政美

5．本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。

6．出土遺物、遺構図及び実測図類は伊那市考古資料館に保管してある。

目　次

序

例　言

目　次

挿図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1

第1節　発掘調査に至るまでの経過……1

第2節　調査の組織……2

第3節　発掘調査日誌……2

第Ⅱ章　遺跡の環境……4

第1節　遺跡の位置……4

第2節　地形及び周辺の遺跡分布……5

第3節　手良地区の地質……7

第4節　歴史的環境……9

第Ⅲ章　遺構と遺物……11

第1節　調査の概要……13

第2節　遺構と遺物……13

（1）　平安時代の遺構と遺物……13

第Ⅳ章　所見……20

挿 図 目 次

第1図　辻西幅遺跡の位置図…… 4
第2図　辻西幅遺跡周辺の地形及び遺跡分布図…… 5
第3図　手良地区地質概界図…… 7
第4図　辻西幅遺跡周辺の地質柱状図…… 7
第5図　地形及び遺構配置図……11
第6図　第7号住居址実測図……14
第7図　第7号住居址出土遺物分布図……15
第8図　第7号住居址出土遺物実測図……16
第9図　第7号住居址出土遺物実測図……17
第10図　第8号住居址実測図……18
第11図　第8号住居址内覆土中焼石群実測図……18
第12図　第8号住居址出土遺物分布図……18
第13図　第8号住居址出土遺物……19

表 目 次

第1表　周辺遺跡一覧表…… 6

図 版 目 次

図版1　遺跡遠景
図版2　発掘調査状況
図版3　遺　　構
図版4　遺　　構
図版5　遺物出土状況
図版6　出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至るまでの経過

伊那市地域の東北部一帯に集落が展開している手良地区は東西に大動脈的な役割を果たしている県道美篶・箕輪線が通過している。この路線はかつては十分な対応が出来ていたが、近年、車社会が末端部にまで波及するに従って、交通量の増加が急激化し、現在の道路幅では不充分な面が目立ってきた。この難問題の打開策は道路拡幅しか手段がないと考え、十数年位前から用地買収が完了した地籍が部分的に拡幅が実施されてきた。用地買収が辻集落でも進み、それに付随して辻西幅遺跡が発掘調査対象地区に組み込まれた。

発掘調査実施前に事前協議や事務手続きが取りかわされているが、その経過を年月日を追って記しておく。

平成７年10月６日　長野県教育委員会文化課郷道指導主事、伊那建設事務所米倉、伊那市教育委員会社会教育課飯塚が合同で事務協議、現地協議が持たれた。

平成８年６月　伊那建設事務所小牧氏と伊那市教育委員会社会教育課担当職員とて事前協議会を幾度も開き、問題点を指摘しあった。この協議で発掘調査を盆前頃に開始したらどうかとのことで意見の一致をみた。

平成８年７月５日付けで伊那建設事務所長と伊那市長とで埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結する。

平成８年７月17日付けで埋蔵文化財発掘調査通知を文化庁長官宛で提出する。この通知には試掘調査の旨を記しておいたが、結果的には本格的な調査となった。

平成８年７月24日付けで伊那市長小坂樫男と市内遺跡発掘調査団（辻西幅遺跡）団長友野良一両者間で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結する。

平成８年８月27日付けで発掘調査終了届を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成８年８月27日付けで埋蔵文化財の拾得について（届）を伊那警察署長宛に提出する。

平成８年８月27日付けで埋蔵文化財保管証を長野県教育委員会へ提出する。

平成８年11月25日付けで埋蔵文化財包蔵地発掘調査変更委託契約書を伊那建設事務所長と伊那市長間で取りかわす。

平成９年１月９日付けで変更委託契約書を伊那市長小坂樫男、市内遺跡発掘調査団（辻西幅遺跡）団長友野良一とて結ぶ。実際に発掘調査を実施してみると、当初期待していた程の遺構遺物の検出は無く、従って大幅な調査日数の削減となった。その結果が当初300万円から100万円の変更経費となった。

第２節　調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に下記のような組織編成を構成し、支障の無いよう万全を期し、調査のスムーズな進捗を願った。

伊那市教育委員会

委員長	小田切　仁
委員長代理	小坂栄一
委員	岸　敏子
〃	小松光男
教育長	保科恭治
教育次長	柘植　晃
事務局	新井良二（社会教育課長）
〃	鳥原千恵子（社会教育課副参事）
〃	宮原　強（社会教育課長補佐）
〃	飯塚政美（社会教育係）
〃	有賀　恵（　〃　）

発掘調査団

団長	友野良一（日本考古学協会会員）
調査員	飯塚政美（　〃　）
〃	松島信幸（第四紀学会会員）
〃	寺平　広（　〃　）
発掘作業員	大久保富美子　酒井とし子　有賀秀子　城倉三成　小田切守正
	松下末春　原　公夫（敬称略順不同）

第３節　発掘調査日誌

平成８年８月６日　晴　辻西幅遺跡発掘現場（茂樹屋商店前）へ発掘器材一切を伊那市考古資料館（伊那市西箕輪羽広）から運搬する。

平成８年８月７日　晴　発掘現場の近くの畑にコンテナハウスを２棟建てる。そのうち、１棟は休憩用に、１棟は道具小屋用にする。発掘現場へバックフォーを入れて掘り下げを開始すると黒々と方形状の落ち込みが見られ、住居址と判明する。第一次調査番号から通してこれを第７号住居址と命名する。

平成８年８月８日　晴　第７号住居址のプラン確認につとめる。第７号住居址の北西、県道箕輪・美篶線と脇道が二叉状に接する一隅に褐色土の落ち込みが検出され、第８号住居址と名

付ける。第７号住居址の東西にベルトを残して掘り進めていくと、カキ目文様を施してある土師器、内黒の土師器、須恵器、灰釉陶器が出土し、平安時代の住居址と断定でき、これに基づき、調査方法の見通しがついた。

発掘風景（第７号住居址）

平成８年８月９日　晴　第７号住居址のドットマップ図を作成しつつ遺物の出土地点とレベルの測定が済んだものは１点、１点、別々の袋に入れて取り上げていった。全ての遺物が取り上げられてから、下層面である床面を目指して掘り進めていく。

平成８年８月12日　晴　第７号住居址の掘り下げを進めていくと、内黒の土師器が完型品の姿で出土した。同住居址出土の遺物ドットマップ図を完成する。住居址のセクション図及び東壁に存在するカマドの立ち割りを行い、そのセクション図を作成する。柱穴のカットを行い、セクション図が取れるように整備を実施する。第７号住居址の東側へトレンチを入れて掘り進めるが、何も成果はなかった。

平成８年８月14日　晴　台風が来襲しそうな模様なので、現場の見回りと、器材の整理、整頓及び遺構の上に架けたシートの再点検を行い、非常時に備えた。

平成８年８月22日　晴　第７号住居址の平面、断面実測の終了。第８号住居址の掘り下げを終えて、写真撮影、平面、断面実測を完了する。

平成８年８月23日　晴　トラックにて次の発掘現場へ器材を運搬する。発掘地点の整備を行い、後で問題が生じないように努めた。

平成８年８月26日　小雨　コンテナハウスの後片付を業者とともにする。

平成９年１月－平成９年２月　図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ入れ、印刷を開始し、校正を行い、３月の報告書刊行に努力を払った。

平成９年３月　報告書を刊行し、本事業の完了をみた。　（飯塚政美）

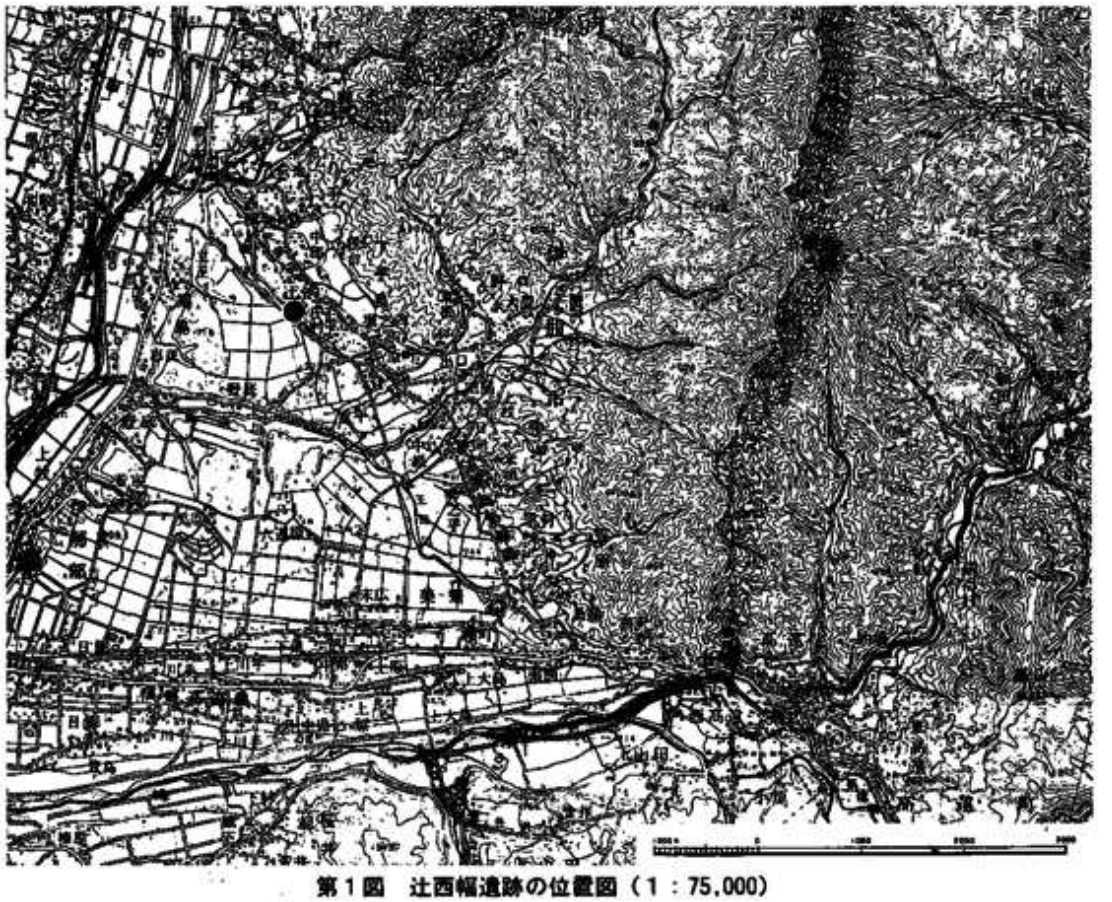
第II章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置

今回の発掘調査地点は第Ｉ次発掘調査地点と接しているので第Ｉ次発掘調査報告書を全面的に用いて本章を記述する。

辻西幅遺跡は長野県伊那市大字手良沢岡、下手良八ツ手地籍辻集落の東方部一帯に広がりをもっている。遺跡地に至る道順は凡そ三方向に限定されるであろう。第一はＪＲ飯田線伊那北駅で下車して東進し、天竜川を渡り、主要地方道伊那・辰野線（通称竜東線）を辰野方面へ約６km北進し、卯の木交差点を右折して県道美篶・箕輪線に入り、東方へ１km位進むと辻集落の大きな三叉路に着く、この周辺一帯が遺跡地の中心地であろう。

第二の道順は途中まで第一の道程と同様である。伊那・辰野線（通称竜東線）を辰野方面へ約4.5km進み、野底集落の北はずれ、伊那北保育所近くの三叉路を右折して、市道野底・手良線を東進する。進み始めてすぐに棚沢川を渡り、しばらく行くと、右手に野底堤が見られ水を満々



第１図　辻西幅遺跡の位置図（１：75,000）

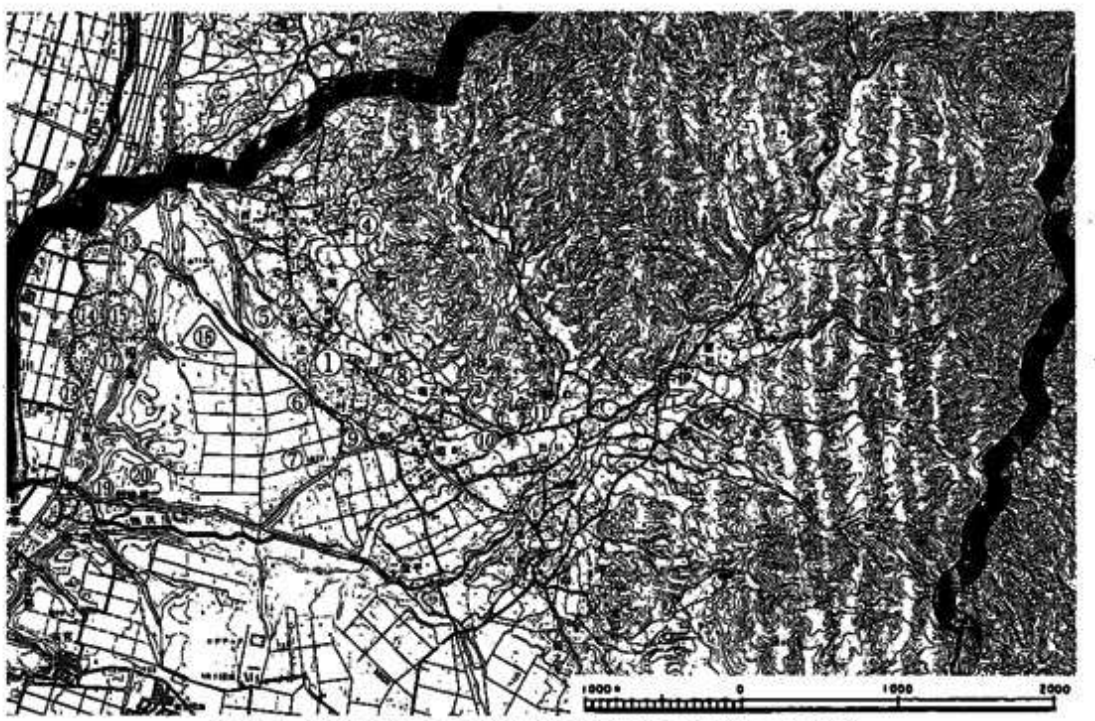
と湛えている。この堤から東へ500m程行くと又、三叉路に直面するが、左折して勾配の急な所を登っていく。登りつめると眼前に福島、手良地籍の大水田地帯が広がり、秋ともなれば稲穂の波が目を楽しませてくれる。水田地帯を左手に見て、北へ1㎞程行くと辻集落に到達する。

第三の道順は伊那市街地より東へ杖突街道を高遠町方面へ約5㎞行くと、近年住宅化が激化している美篶上原集落に至る。上原集落と上大島集落の境界付近で杖突街道と別れて左に折れ北へ向かうとすぐに左に美篶小学校校舎が見える。小学校のすぐ北側は三峰川右岸第二河岸段丘が東西に走り、段丘崖には見事な礫層やテフラ層が厚く堆積し、地質学研究にはかっこうな場所である。段丘斜面の山林地帯を登れば広々とした平坦地が続く、この平坦地は、以前、畑地や森林であったが、三峰川総合開発時に引水して、水田化した。末広集落を通過し、杖突街道分岐点から約2.5㎞で手良中坪集落に至る。中坪に祭ってある八幡社の前で左折して県道美篶・箕輪線を西進し、約2㎞で手良地区の中心地に及ぶ。

第2節　地形及び周辺の遺跡分布

1．地形

辻西幅遺跡の存在する付近の地形は東西の方向から三峰川によって形成された台地である。三峰川の源流は南アルプスにあり、数多くの小河川を集めて、最終的に天竜川に合流する。



第2図　辻西幅遺跡周辺の地形及び遺跡分布図（1：50,000）

沢岡川、瀬沢川、八ツ手川によって再浸食されてできた複雑多岐にわたる小段丘地形をつくっている。遺跡地の北側と南側には湿地帯が広い範囲であり、かつては湧水が多量にあったと想定される。従って、遺跡地周辺の水田は沼田状の景観を呈し、耕土は黒々として肥沃であった。これらの水田は大部分圃場整備され、近代化農業が進展しつつあった。

2．周辺遺跡の分布

本遺跡を中心とした周辺遺跡には、縄文時代早期～江戸時代に至るまでの各種各様な遺跡が存在している。これらを時代幅で考えてみると約1万年の数値に達しよう。

第1表にその一覧表を掲示したが、内容項目は遺跡名、所在地、地形、時期であった。Noについては第2図辻西幅遺跡周辺の地形及び遺跡分布図内の番号とは一致している。時期については土器編年を採用して記述した。

辻西幅遺跡周辺の遺跡発掘調査は過去、島崎遺跡（第1次～第2次）、堤林遺跡、山の田遺跡、鍛冶垣外遺跡でそれぞれ実施された。これらの調査は圃場整備事業実施前に行う緊急発掘調査であり、日程、予算面で大いに制約があった。

前述した4遺跡の発掘調査成果については第4節歴史的環境のところで触れるので、今回は省略しておこう。

遺跡の分布状況を概観してみるに、棚沢川、八ツ手川、沢岡川等々大小河川によって形成された河川段丘面上に存在している場合が多く、山麓扇状地面上の遺跡存在性は低い。これは水の問題が密接に関連しているかと想定される。（飯塚政美）

No.	遺跡名	所在地	地形	時期
1	辻西幅	手良沢岡	扇状地上	平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
2	島崎	手良八ツ手	台地上	平出3A　井戸尻　曽利　中島式　中世陶磁器類　近世陶磁器類　中世内耳土器
3	堤林	〃	扇状地上	大洞A　櫂王　平安時代土師器　永楽通宝　中世陶磁器類 近世陶磁器類
4	山の田	〃	山麓線上	楕円押型文　鵜ヶ島台　子母口　梨久保　井戸尻　曽利　水神平II　平安時代土師器　平安時代須恵器
5	中原	〃	扇状地上	中島　平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
6	垣外	手良下手良	平地上	曽利
7	松太郎窪	〃	扇状地上	楕円押型文　曽利　平安時代土師器　平安時代灰釉陶器
8	角城	〃	台地上	平安時代須恵器
9	南垣外	〃	〃	〃
10	鍛冶垣外	手良野口	扇状地上	曽利　堀ノ内　中島　平安時代土師器　平安時代灰釉陶器　平安時代須恵器　中世陶磁器類
11	古八幡	〃	山麓線上	中島
12	南原	福島	段丘上	曽利　堰ノ内　平安時代土師器　平安時代灰釉陶器　平安時代須恵器
13	大上平	〃	〃	平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
14	福島上平III	〃	〃	〃
15	福島上平I	〃	〃	平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
16	池火平	〃	〃	曽利　中島　平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
17	福島上平II	〃	〃	平安時代土師器　平安時代須恵器　平安時代灰釉陶器
18	福島上平IV	〃	〃	〃
19	福島古墳群	〃	〃	横穴式石室　円墳　8基
20	原	〃	〃	曽利

第1表　周辺遺跡一覧表

第３節　手良地区の地質

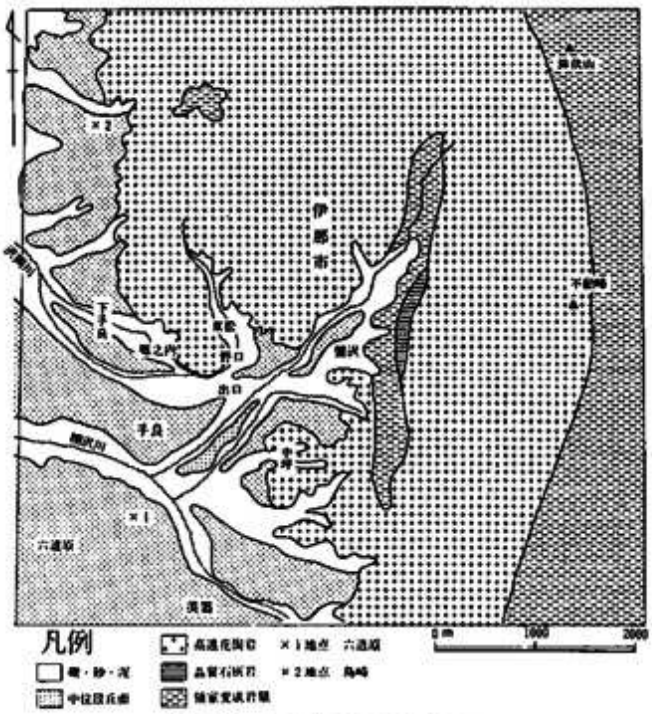
１．手良地区周辺の地質

手良地域は、六道原扇状地の三峰川麓部一帯に含まれている。東部山地は領家変成岩帯の高遠花崗岩より成り、不動峰（1374m）と鉢伏山（1456m）を結ぶ伊那市と高遠町の分水嶺から高遠寄りは、領家変成岩である。また、この変成岩類は手良地区の最奥地蟹沢の東方にも高遠花崗岩に囲まれて南北に細長く分布している。この地域に分布している領家変成岩類は、古生代及び中世代に海底に堆積した砂や泥を主とする堆積物が、広域変成作用を受けて雲母片岩や黒雲母片麻岩に変化したものである。

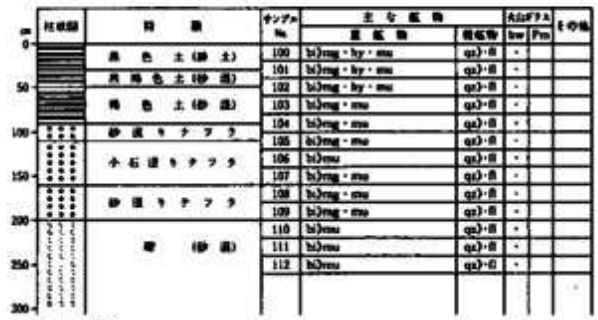
また、これらの変成岩は、中世代末から新生代古第三紀にかけて貫入した高遠花崗岩によって接触変成作用を受け、花崗岩の周辺部では黄青石ホルンフエルス等を含む接触変成体を形成している。

手良地域と六道原地域の境を成している大きな川として棚沢川の支流である土王田川があげられよう。この川の源は高遠花崗岩が岩相の主流を成している笠原地籍であり、この一帯での流れは急である。

土王田川両岸は比高数mにわたる河岸段丘を形成し、この面は美事な水田地帯が展開している。



第３図　手良地区地質概界図



凡　例

〔柱　状　図〕 黒土・黒褐色土　石混りテフラ　礫

〔鉱　　物〕 hy：しそ輝石、bi：黒雲母、mu：白雲母、mg：磁鉄鉱、qz：石英、fl：長石などの鉱物が含まれている。

〔火山ガラス〕 bw：バブル型火山ガラス、Pm：軽石型火山ガラス、火山ガラス含有量　●10%以上　・10%以下

第４図　辻西幅遺跡周辺の地質柱状図
（第３図　×２地点）

2．手良地区の段丘

この地域は大きく見れば伊那市東部地域、ややせばめて見れば三峰川右岸地域に属している三峰川によって造り出された六道原扇状地と、棚沢川あるいはその支流などの小河川によって形成された扇状地の接点に位置し、更に、その扇状地を棚沢川、沢岡川、その他の小河川が再浸食して複雑多岐にわたる見事な段丘状地形を成している。

1987年に第３図の×１地点で大春化学工業所により白土採掘のため、深い竪穴が掘られた。この地点では、六道原扇状地の礫層の上に約８万年前に降下し、堆積した御岳第１浮石層（pm－１）が乗っている。

pm－１とはカオリンナイト、ベントナイトとも呼ばれている。御岳火山に起因し、木曽御岳火山活動史で第二期活動期に当たり、降灰したものが堆積し、のちに粘土化したものである。採掘したばかりはベトベトしている。乾燥すると、初めは堅いが放置しておくと白色の粉末となる。黄色のものは多孔質で、繊維状を呈する。乾燥すると量は半減し、手でもむと粉になり黄色味がなくなる。湿気を帯びるとまた黄色を成す。

白土からはアルミナをつくり、みょうばんや、印刷用インキの製造、カオリンからは陶器の原料、セメントの材料、製紙、製薬、化粧品等である。カオリンはアート紙の表面につや出し用に塗りつけている。

pm－１の上部にはそれ以後に降下した軽石や火山灰が覆っている。従って、この面が形成され、段丘化した年代はpm－１の軽石が降下した８万年前よりも以前のおよそ10万年前頃である。第３図の中位段丘面はおそらくこの時代か、或はやや後に離水して段丘化状に走ったものと思われる。

3．辻西幅遺跡の地質

第３図手良地区地質概界図×２地点での地質調査坑の観察結果により述べていく。この調査地区は辻西幅遺跡と接した地点であり、好都合であった。観察結果によれば、この面上では軽石や火山灰層の存在はなかった。礫層の上に厚さ２ｍの砂混じりテフラ層が堆積し、やや秩序が保たれていた。礫層を構成する種類は砂岩・粘板岩・緑色岩を主とする５～20㎝の亜円礫で風化の進化度は顕著であった。これらの礫は東方の山地に存在する領家帯の岩石ではなく、中央構造線よりもさらに東方の三峰川帯、秩父帯、四万十帯から運ばれてきたものであり、三峰川の扇状地礫層と想定される。

砂層を構成する砂粒は黒雲母や白雲母・石英・長石の他に磁鉄鉱・しそ輝石等が混入する。これらの鉱物は火山起源のものでなく、東方山地の領家帯の岩石を含んだ鉱物であり、主として沢岡川の上流の東松方面から流水によって運ばれて堆積したものと考えられる。砂層の上部から下部にかけて姶良Ｔｎ火山灰（九州鹿児島湾の姶良カルデラから約25,000年前に飛来した火山灰。略称ＡＴ）の火山ガラスと形態が同じ火山ガラスがわずかではあるが含まれている。おそらく二次的に移動してきて混入したものと思われる。（松島信幸　寺平　宏）

第４節　歴史的環境

伊那市東部地域に含まれている手良地区は天竜川左岸河成段丘と、天竜川主要支流の１つである棚沢川や三峰川の活動によって形成された段丘面をベースにして、その上に東側山麓地帯より流出した土砂を集積して広大な扇状地面をつくり出した。扇状地形成活動が終わった後に厚いテフラ層が覆っており、その上に、さらに安定した土壌が堆積している。

前述した地理的・地形的・地質的な背景を基盤にして八ツ手地籍の歴史はくりひろげられてきたのである。前書はこのあたりでとどめ、次に本論である歴史的環境に踏み入っていく。八ツ手地籍に人間の営みが開始されたのは現在、分かっているかぎりでは山の田遺跡出土の縄文早期楕円押型文土器（約8000年前）が最古である。また、同遺跡から縄文早期末葉で貝殻条痕文に主特徴を持つ茅山式土器、縄文中期初頭の梨久保式土器、中期中葉の井戸尻式土器、中期後葉の曽利式土器の出土が過去の発掘調査報告書に掲載されている。

弥生時代に入り、天竜川水系を遡って稲作農耕文化をたずさえた水神平式土器文化が伊那谷へ波及してくる。この文化を実証する土器片が前述した山の田遺跡から出土している。当時は湿田が多く、沢水が集まる場所に田をこしらえたのであろう。この遺跡は標高が760m近くあり、近年、問題になってきている弥生時代高地性集落の草分け的存在ではないだろうか。当然ながら畑作農耕も盛んに実施したことと思われる。

古墳時代に入り、八ツ手集落から瀬沢川を隔てた対岸には六ツ塚古墳の残骸が見受けられ、さらに、天竜川左岸段丘突端部に数多くの古墳群が列状に存在している。現在、八ツ手地籍内には古墳時代集落址の発見は認められていないが、近在の古墳群からみて、いつかは発見されるに相違ないと思われる。

平安時代承平５年（935）に編纂された倭名類聚鈔には「弖良（てら）郷」なる名が最初に見られる。「弖良」の由来については「弖良公」と称する帰化人が中坪の奥地滝の沢川上流に住んでいたと伝承されている。この地は大百済毛、小百済毛と呼ばれている。この説については諸説が提唱されているが、まだ決め手になるのは出ていない。南垣外遺跡から灰釉長頸瓶と人骨の出土が伝えられており、さらにこの南垣外から棚沢川に沿って広大な平坦面が展開し、この西端部がかの有名な福島遺跡である。近年の研究から福島遺跡は弖良郷に含まれていると定説化づけられている現状であるが、さらに、今後の研究が重大な課題となろう。鍛冶垣外遺跡からも平安時代の遺構・遺物の検出が報告書によって知らされるようになった。

昭和60年度の発掘調査によって、堤林・島崎両遺跡から中世陶磁器類が相当量出土した。前者の遺跡出土遺物は次の通りである。古瀬戸灰釉四耳壺（15世紀）、古瀬戸鉄釉稜皿（16世紀前半）、永楽通宝（１枚）。後者の遺跡出土遺物は次の通りである。中津川大平鉢（13世紀）、中国元白磁碗（13世紀）、中国明白磁碗（15世紀）、中国明青磁碗（15世紀）、古瀬戸灰釉大盤（15世紀後半）、古瀬戸鉄釉摺鉢（16世紀前半）、古瀬戸灰釉皿（16世紀中葉）、古瀬戸灰釉丸皿（16世

紀前半)、古瀬戸鉄釉甕（16世紀）

以上の事実からして鎌倉前期から戦国時代にかけて城館を中心にして農村集落の営みが確証づけられる。中国青磁・白磁類は伯来の高級品で、近くにある小松の城、登内の城との関連性を強く示唆するものである。一方、太平鉢、擂鉢、大盤、皿、丸皿、甕等々の日常雑器類は中世農村集落の繁栄を意図するものであろう。

近世に入り、手良地区は天領に含まれ、代官は千村氏が統治していた。千村氏の屋敷は岐阜県可児市久々利にあり、陶器類が地域的に見て安易に入手したのであろう。従って、島崎遺跡より多量の「瀬戸物」が出土し、このことを物語っている。陶器類の優品は17世紀代では瀬戸鉄釉擂鉢、志野長石釉皿、18世紀代では瀬戸灰釉細筒形三足香炉、瀬戸御深井釉茶碗、瀬戸灰釉こね鉢、瀬戸灰釉碗、19世紀代では瀬戸鉄釉燈明受皿、瀬戸鉄釉茶碗、瀬戸染付茶碗、伊万里雪輪文茶碗、瀬戸灰釉香炉、志野長石絵瀬戸等々が検出され、江戸時代全般にわたって農村が豊かであっただろう。

最後になるが、辻西端遺跡周辺の小字名を列記し、その由来について記しておく。

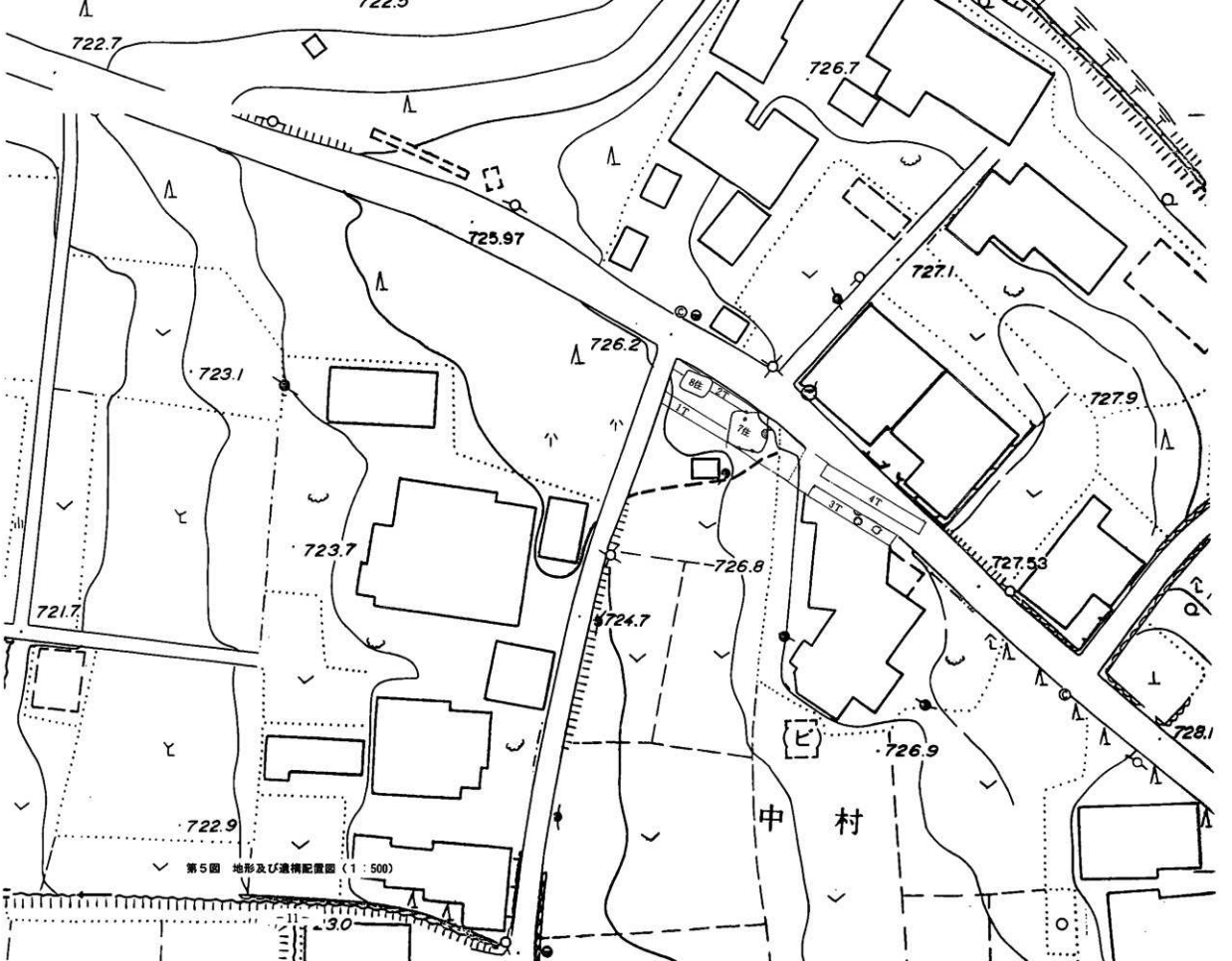
今回発掘調査を実施した本遺跡周辺の小字名は西垣外と呼ばれている。遺跡地の周辺にはかつてその経済基盤が農業に依存していたと思われる荒田、中田、二反田、フサイ田、清水田、塚田、前田、打田、角田、杏田、久保田、堤田、餅田、柳田、箕輪田、九畑、角畑、ハンナワ畑、辻畑等々の小字名が現存している。

南垣外、西垣外、宮垣外、垣外等があり、極く一般的であるが、中世土豪の支配地域界がある程度可能となりつつある。この地域を統治した中世土豪の城館はどこにあったのであろうか。発掘調査地点から北へ1㎞程行くと「古城」名の小字名が見られ、そこは大きな沢を巧みに利用して築いた館となっている。この一帯は前述した小松の城と呼ばれ、小松姓の一族が屋敷を構えている。この城郭内には堀と段が現存している。

下手良大日堂東側境内地に建てられている塔は近世の五輪塔群である。火輪の軒公配、地輪の縦長状況から見て、江戸時代の建立と想定できえよう。

今回、発掘調査を実施した地点には下手良阿弥陀堂が現存していた。この堂について主なことを記す。1宗旨－曹洞宗　2本寺－澄心寺　3本尊－阿弥陀如来坐像（仏身高21.0cm　台座高9.0cm）蓮華座。

（飯塚政美）



第５図　地形及び遺構配置図（１：500）

第１節　調査の概要

辻西幅遺跡の範囲内で、今回の発掘調査地区は一部は畑地、駐車場、宅地、堂にそれぞれ土地利用されている。今回の調査は県道美篶・箕輪線拡幅工事事業に伴う理由によったために、その調査範囲は極めて限定されてきた。発掘調査実施に先立ち、平成６年度第Ｉ次発掘調査結果が大いに参考となり、調査面積は隘狭であったが、その成果は当初より期待を持って調査に当たった。

調査の結果、平安時代竪穴住居址２軒が検出され、それらを第Ｉ次調査からの関連性を重要視して第７号住居址、第８号住居址と名付けた。第８号住居址は約半分位しか調査は出来なかった。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土し、詳細なことについては後述するが、主な特徴を次のように記しておく。出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が主流で、概ね、平安時代９－10世紀に属するものと推定される。土師器の器型は甕、杯、甕類が多く、ロクロ痕、糸切り底の残存が顕著であった。須恵器は土師器に比較して少量で、その主な特徴点は甕型が多く、叩目文が主であった。灰釉陶器の出土はわずか１片であった。

第２節　遺構と遺物

（１）平安時代の遺構と遺物

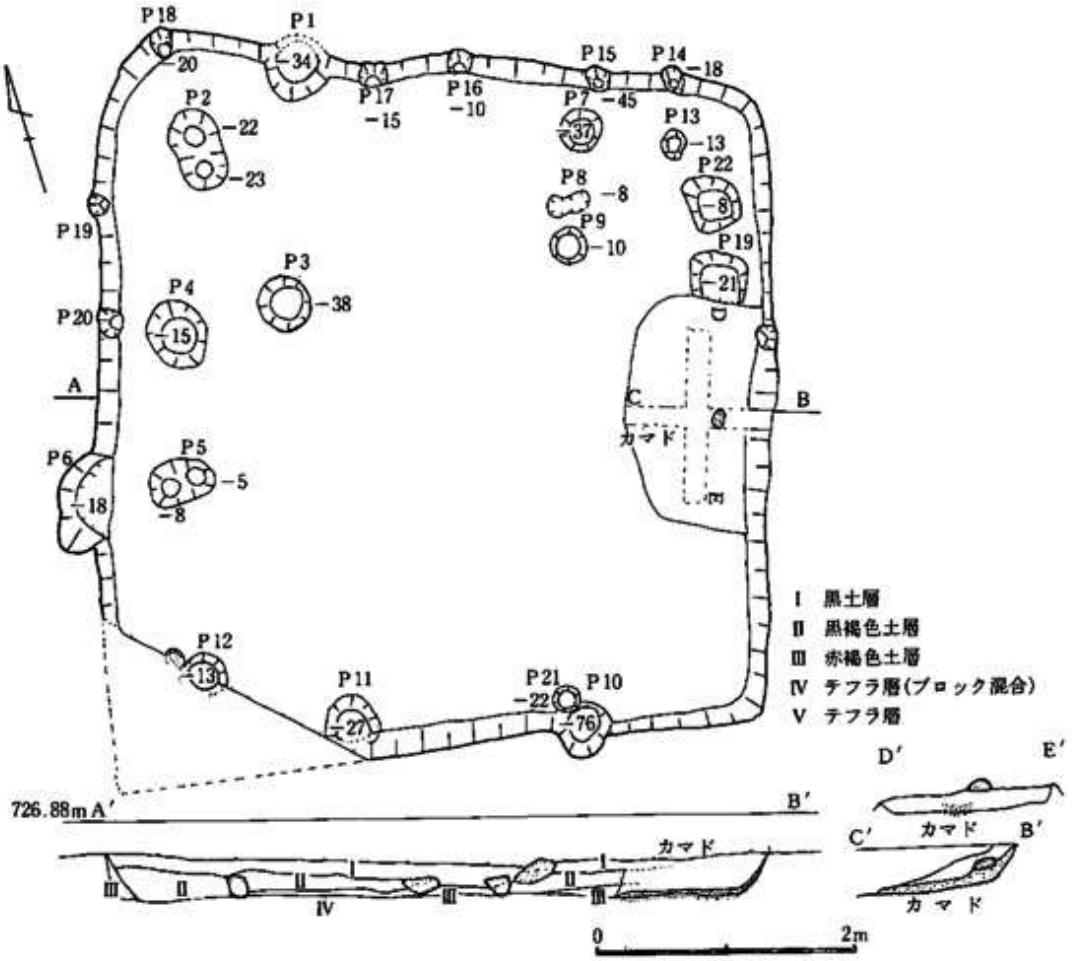
第７号住居址（第６図　図版３）

本址は県道美篶・箕輪線現道の南側、茂樹屋商店真南の堂地跡に検出され、北西に第８号住居址がある。表土層面から50cm位下ったテフラ層を掘り込み構築された竪穴住居址であって、隅丸方形状平面プランを呈する。本址の発見された付近の地層及び住居址埋没土層は上から次のような層序になっている。黒土層、黒褐色土層、赤褐色土層、テフラ層（ブロック混合）、テフラ層。

規模は南北５ｍ25cm位、東西５ｍ30cm位を測る。壁高は東側で45cm位、その他三方向の壁高は40cm位を測定でき、やや垂直気味を呈している。床面は大般平坦で、堅い叩きが良好で、それが全面に及んでいる。主柱穴は住居址の中央部よりやや西側に寄った地点に南北に３本、カマドの北側に２本見られる。南壁の東側寄り、西壁の南側寄りに斜目状に掘り凹んだ柱穴が存在している。これは形態より見て母屋柱的用途を有した柱穴であろう。

カマドは東壁のほぼ中程に構築され、南北１ｍ75cm位、東西１ｍ15cm位の規模を有する砂質混合石芯粘土カマドの仕組みであって、粘土の貼り付けは極めて良好である。焚口付近と東壁に密着した煙道部付近に焼土が赤々と明瞭に浮き出ていた。カマドの周辺及び床面に人頭大程の焼石が相当量、散乱状に発見された。これはカマド廃絶時に一時的な破壊工作の跡と想定されよう。

出土遺物からみて、本址は平安時代中期頃と思われる。住居址の時代決定は第９図No.12の灰釉陶器壺による。これは黒笹90号窯～折戸53号窯期と考えられる。（飯塚政美）



第６図　第７号住居址実測図

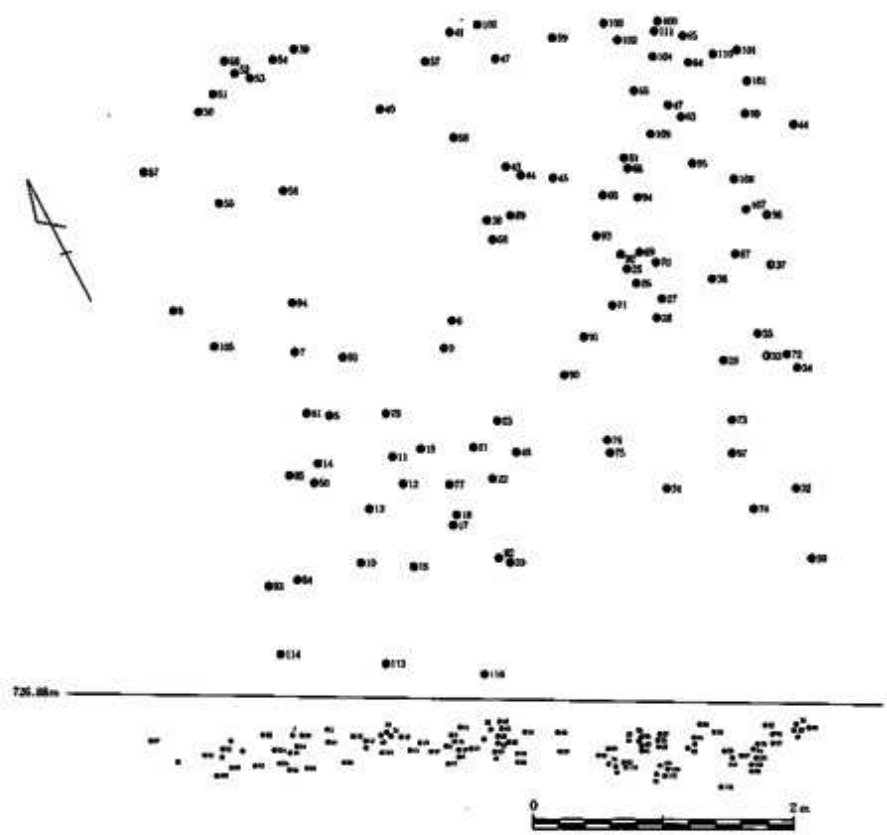
遺　物（第７～９図　図版５～６）

第８図の１は遺物番号No.111で土師器壺であり、口縁径14.3cm、高さ４cmを測る。砂粒が多く含まれ、焼成は中位である。口縁は胴部よりやや内向きに立ち上がり、外面は轆轤痕が目立って見える。２はNo.97で、土師器坏を成し、口縁径14.5cm、高さ4.1cmを測る。口縁部は胴部より直の方向に立ち上がっている。内面は黒色塗りで箆削りの痕が残り、同様に底部も箆削りである。外面は轆轤目が目立って見える。また、器には墨書が書れている。文字の上面が欠かれているので明らかではないが、「王」という文字ではないか、本遺跡から第Ｉ次調査時に「王」と字の書かれた墨書土器が発見されているが、参考までに記しておく。

３はNo.105の土師器坏であり、底部の立ち上りが少ないので、口縁径や高さを記すことができないが、底径は6.5cmである。外面には轆轤痕が残る。また、外面上部が欠損していて明瞭では

ないが「王」の字と読める墨書がある。内黒であって、編在した切り放しの糸切り痕である。

4はNo.103の土師器埦であり、口縁径13.2cm、器高は3.7cmを測る。器型は胴部あたりから直の方向に立ち上がっている。外面には整形時の轆轤痕がのこる。内面は黒色研磨で篦削の仕上げである。底部は切り放なしの糸切り痕である。



第7図　第7号住居址出土遺物分布図

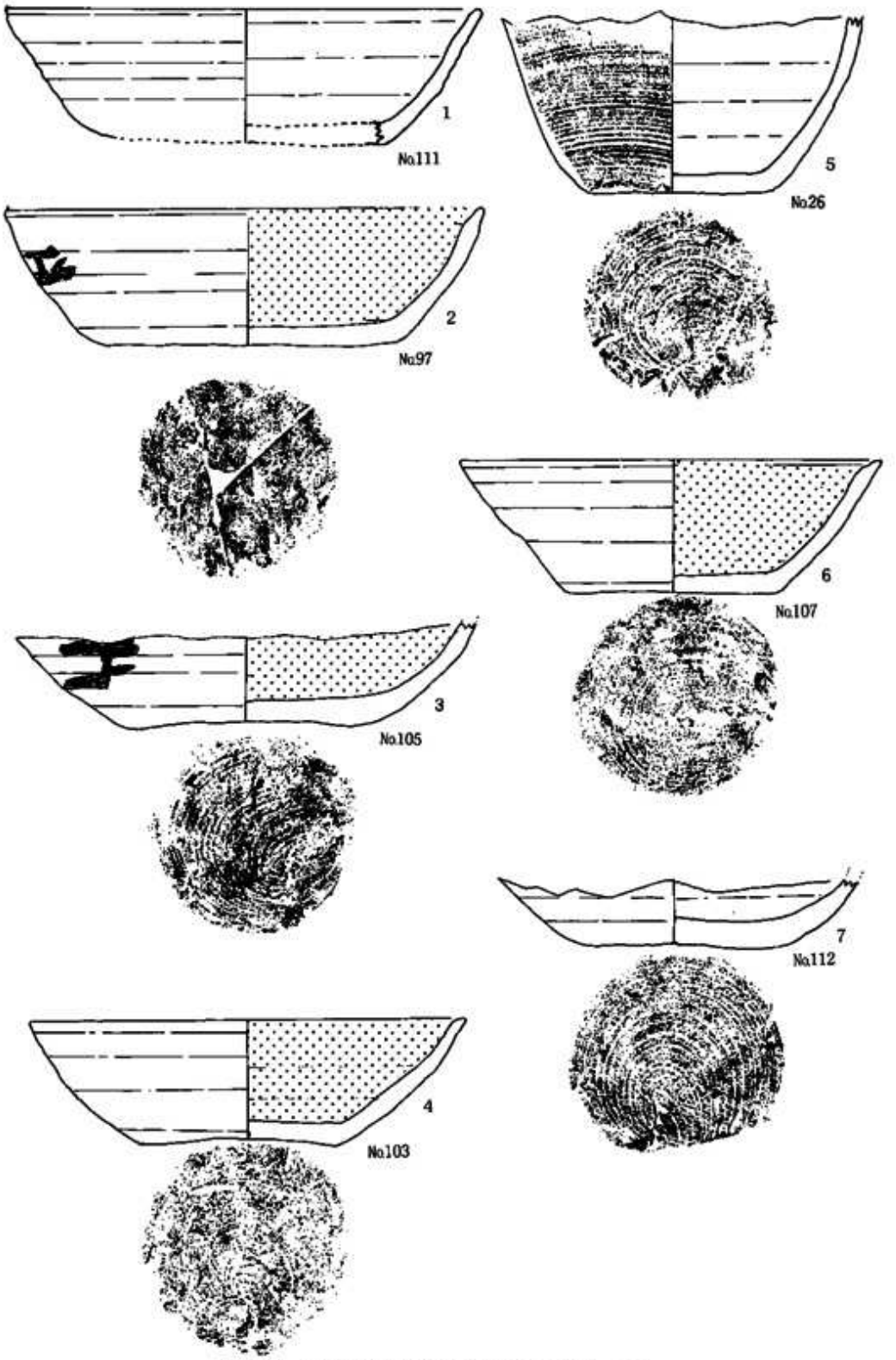
5はNo.26で土師器甕の底部である。器の大きさは測定できないが、底径は5.6cmを測る。外面には楕状工具による横位の平行沈線文が施されている薄手の甕型土器である。

6はNo.107で、土師器坏を成し、口縁径12.8cm、高さ3.9cm、底径6.3cmをそれぞれ測る。外側面は轆轤痕が見られ、内面を内黒でその整形に篦による整形痕が見える。

7はNo.112で、底部のみの残存であるので、その大きさを知ることはできないが、底径は8cmを測る。外側面には轆轤痕がのこる。底部の内側には回転による円形の指頭痕が見られ、外面には糸切りの切り放し痕が明らかに残っている。

第9図の8はNo.82で、須恵器甕の破片である。器厚は6mmと薄手の方に属し、焼成は良好である。外面は平行の叩目が施され、内面は篦状工具による成形がなされている。9はNo.80で、須恵器甕の破片であり、器厚は9mm～1cmと厚手に属する。外面の文様は平行線文の叩目文が施され、内面は篦削りによる成形が行われている。

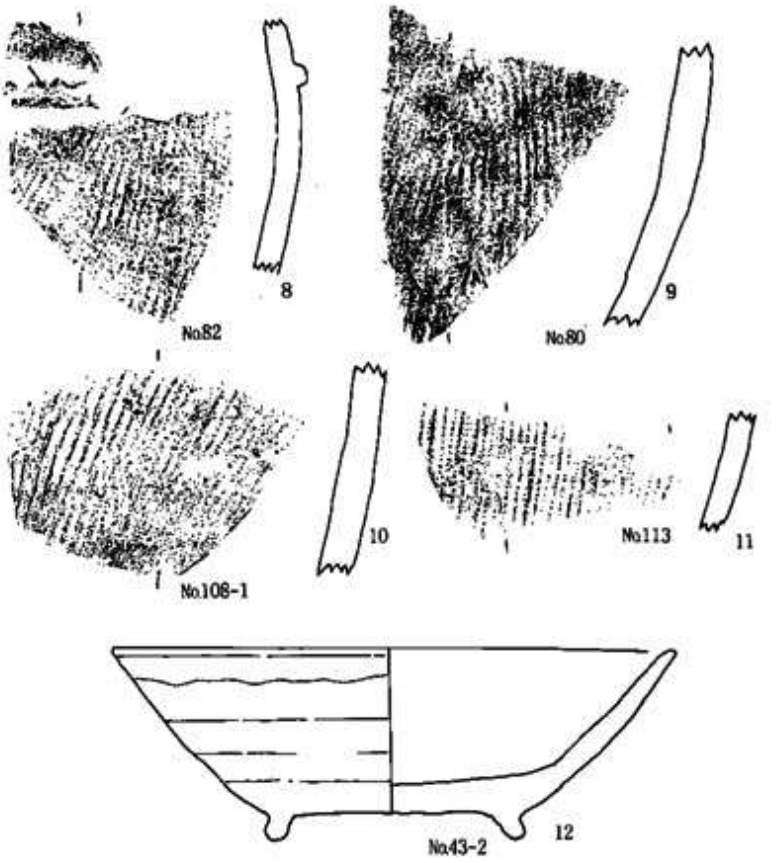
10はNo.108-1で、須恵器甕の破片である。外面は平行線文の叩目文が施されて、内面は篦削りによる成形が施されている。11はNo.113の須恵器甕の破片である。外面には縦方向の格子目状の



第8図　第7号住居址出土遺物実測図（1：2）

叩目痕が施され、内面は箆状工具による成形痕が見られる。

12はNo.43-2の灰釉陶器椀である。口縁径は14.6cm、高さ4.3cmをそれぞれ測定し、高台は丸味のある付高台である。外面は轆轤の目が見られる。また、外面の釉は口縁部のみに施されているのに対し、内面は全域に施釉されている。底部はわずかに轆轤目を認める。胎土は小粒の黒雲母を含み、それらの色調からして猿投窯と思われ、黒笹90号窯～折戸53号窯期と考えられる。　（友野良一）



第９図　第７号住居址出土遺物実測図（１：２）

第８号住居址（第10～11図　図版４）

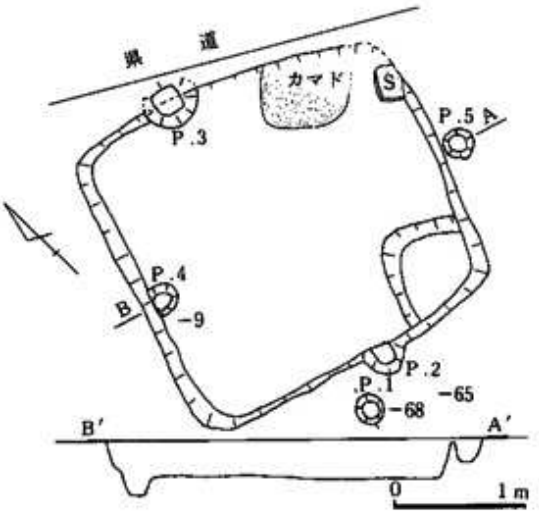
本址は南東で第７号住居址に近接した位置に発見され、北側は現道舗装道路下に広がっている為に発掘調査は不可能であった。表土面から45cm位下ったテフラ層面を掘り込んで構築され、検出された南東、南西、北西の三隅の状態から察して、隅丸方形状の平面プランを呈する竪穴住居址である。規模は南北２ｍ50cm位、東西２ｍ65cm位を測り、比較的に小型であった。

壁高は浅いところで、25cm位を、深い所で40cm位を測り、四壁とも垂直気味を呈し、堅く、良好であった。床面はところどころに若干の凹凸が認められたが、全般的に見て、大体平坦で、堅い叩きを呈していた。柱穴は数本検出されたが、直径20～30cm内外と比較的に小型であって、住居址の規模に比例していると思われる。柱穴の中に底面が方形状のものが２本確認された。それはP2とP3であった。

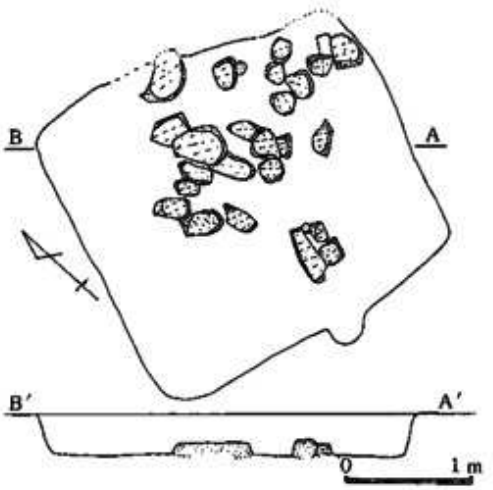
カマドは北東隅付近に設置してあり、石芯粘土カマドの形態を成し、南北想定70cm位、東西65cm位の規模を持っている。焚口付近は赤々と焼土が堆積していたが、煙道の状態は現道路敷下になっていて調査は不可能であった。カマドの周辺に焼石が多量に散乱していた。これらは

カマドに使用した石をカマド廃絶時に意識的に破壊して、捨てたものであろう。カマド周辺に土師器杯、土師器破片が相当量出土し、従って、本址は平安時代中期の住居址であろう。

本址の北側や、現道路舗装面下の発掘調査をもう少し広範囲で実施したならば、数多くの住居址の検出があろう。 (飯塚政美)



第10図　第８号住居址実測図



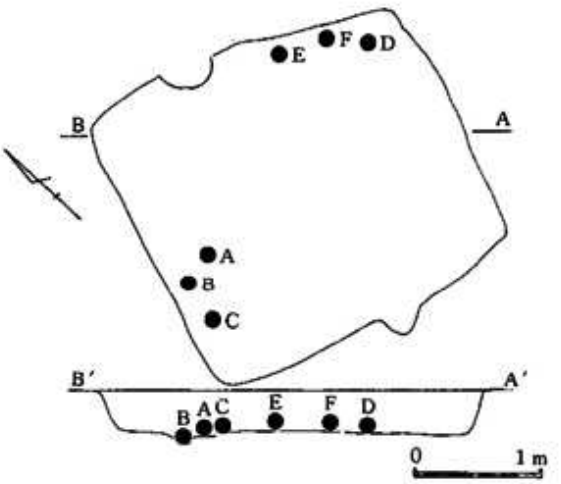
第11図　第８号住居址内覆土中焼石群実測図

遺物（第12～13図　図版５～６）

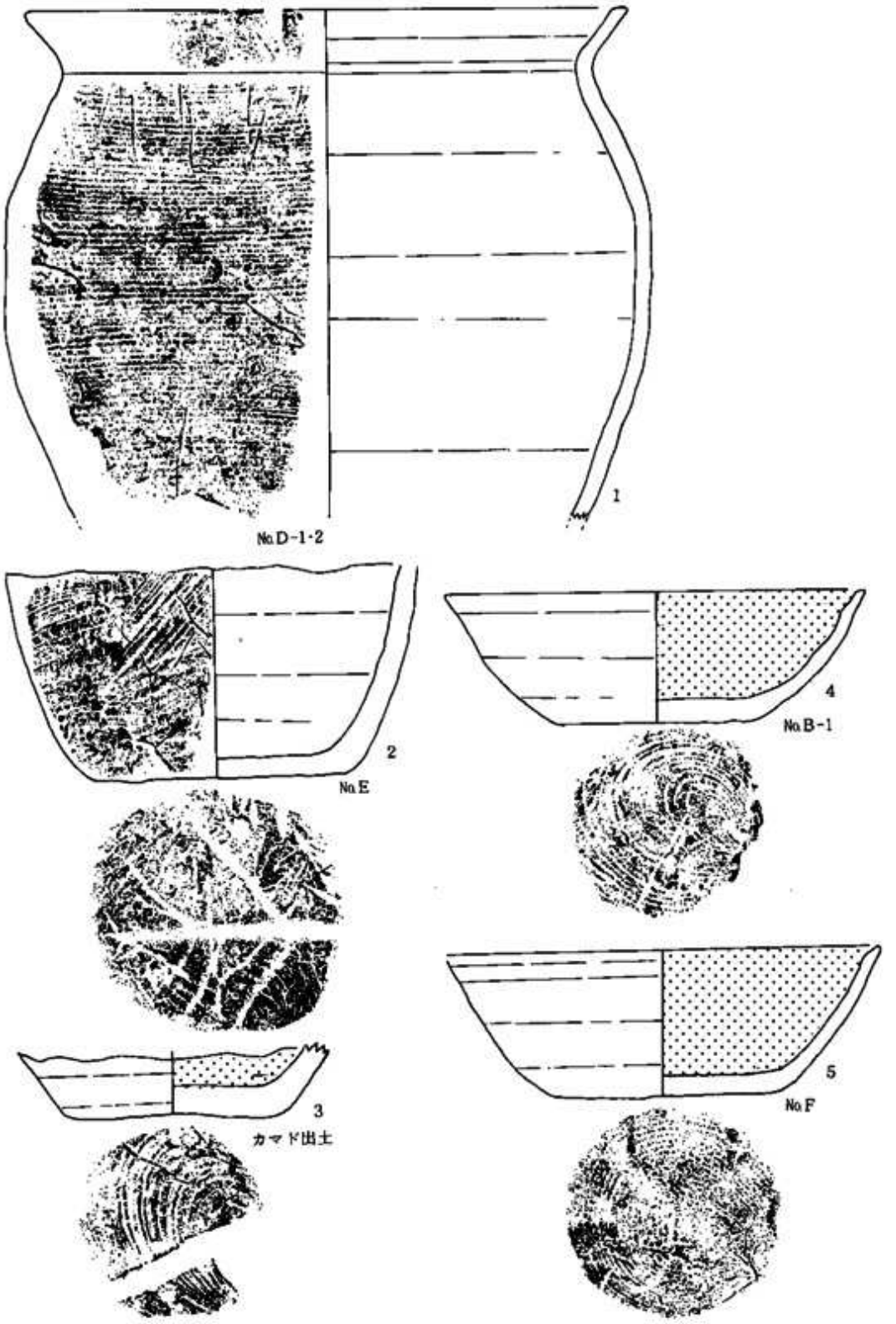
第13図の１はNo.D－１、２で、土師器甕である。口縁径は18.6cmを測れるが、器高は底部欠損のために不明。器厚は薄く４mm～６mm。口縁部は大きく外反し、外面には櫛状施文が横位に全面的に施されている。

２はNo.Eで土師器甕の底部であり、底径は7.7cmを測る。外面の施文は櫛状工具により横位、または斜位に引かれ波線文が施されている。木葉痕底部である。

３は土師器内黒埦でカマド内より出土した底部破片で、底径は6.7cmを測る。糸切り底を呈する。４はNo.B－１で土師器内黒埦である。口縁径12.9cm、器高４cmを測る。外面は轆轤痕が、内面は黒磨きで縦に筆による成形痕がそれぞれ見られる。５はNo.Fで内黒土師器埦である。口縁径は13.4cm、器高は4.4cmを測る。外面は轆轤痕の外に筆による成形が、内面は内黒磨きのほかに筆状工具による縦方向に成形がそれぞれ行われている。また、底部は糸切りの切り放しである。 (友野良一)



第12図　第８号住居址出土遺物分布図



第13図　第８号住居址出土遺物（１：２）

第Ⅳ章　所　見

今回の辻西幅遺跡発掘調査は県道美篶・箕輪線拡幅工事事業（正確には緊急地方道路整備事業（A）伊那市手良辻地区）による埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査である。この調査報告書は平成８年度内に発刊する責務があるため、報告書作成に充分なる時間を費やせなかった。従って、実測図及び図版を主体にした体裁になった。第Ⅰ次調査結果（平成６年度に実施）をも踏まえて所見を述べることにする。

第Ⅰ次調査では平安時代の竪穴住居址６軒が、今回の第Ⅱ次調査では平安時代の竪穴住居址２軒がそれぞれ検出された。辻西幅遺跡は表面採集の調査結果よりかなり広い範囲にわたって集落の存在性を強く示唆してくれる。

本遺跡全体像の把握方法はこのくらいにしておいて第Ⅱ次調査結果について極、簡略に述べる。住居址２軒は共に隅丸方形状の竪穴住居址であり、石芯粘土竈を構築してあった。竈の設置位置は第７号住居址では東壁中央部付近に、第８号住居址では北東壁付近にきちんと作り上げてあった。この設置位置は第７号住居址では極、一般的であるのに対し、第８号住居址のような事例は極めて、珍しく、伊那市内で今までにほんの数例の報告しかない。さらに、この住居址は、規模（一辺2.5ｍ位）と前述した竈の位置両面より想定して何か特殊な住居址と思われる。あえて、仮説をたてるならば隠居的なものか。今後の事例増加とともに結論が編み出されてくるであろう。

次に遺構に伴う遺物に触れておく。第７号住居址出土遺物は土師器甕、土師器甕、須恵器甕、灰釉陶器であり、これの胎土状態からして猿投窯産で、その生産時期は９世紀～10世紀代の黒笹90号窯～折戸53号窯の所産と思われる。いづれにしろ住居址の時期決定に最も役立つ好資料である。第８号住居址は土師器甕、土師器甕が出土しているが、その量は第７号住居址に比較して少なかった。

次に第７号住居址より出土した墨書土器について、その意義付けと、今まで伊那市内で出土したそれについての一般論を述べる。第７号住居址から２点ではあるが、墨書土器が出土した器自体が破損したり、墨自体が剥落していて読みにくいが、全体像から察して「王」と読めるように思われる。このようなものは第Ⅰ次調査時に第４号住居址から３点出土している。

「王」は大王、天皇などを象徴的に表記し、「公」、「君」など同じ意味あいを持っている。前回、第Ⅰ次調査時第４号住居址の形態、今回の第７号住居址の形態を勘案して見て、集落の統率者クラスの居住性の度合いがかなり高くなってきたと思われる。

現在までに伊那市地域内から出土した墨書土器は確認されているだけで56点に及ぶ。これらについて各種、各方面から考えて見てみよう。

墨書土器を出土した市内の遺跡名と所在地を記すと次の通りである。

・御殿場遺跡（伊那市富県北福地）・根木谷中畑遺跡（伊那市富県北福地根木谷）・芝王遺跡（伊那市富県北新）・和手遺跡（伊那市西春近諏訪形）・菖蒲沢遺跡（伊那市西春近諏訪形）

・山本田代遺跡（伊那市西春近山本）・砂場遺跡（伊那市手良中坪）・福島遺跡（伊那市福島）
・上ノ山遺跡（伊那市西町）・辻西幅遺跡（伊那市手良沢岡、下手良八ツ手）

次に56例を統計的に論を進めてみる。

遺構の種類及び時代決定－56例出土した遺構を機能的に細分化すると竪穴住居址22軒、柱穴址1棟であり、これらは全て平安時代に該当し、墨書土器の上伊那への普及は平安時代に入って開始され、平安時代中期頃に隆盛期を迎える傾向にある。今後、出土資料の細分化が進めば進む程、時代の細分化が可能となってくる。1つの遺構内からの出土例は、一個体出土のものから、山本田代遺跡第1号住居址の12個体出土のようなものと、出土個体数に多少のバラツキがあったが、全般的にみて、墨書土器を出土した住居址は、その遺跡内の中心部分に存在する傾向にあり、その規模も大きく、金属製品等特殊な出土品が目立っている。

器の種別－出土例56点のうち、土師器が47点、須恵器8点、灰釉陶器1点と極めて極端な数値を示している。須恵器、灰釉陶器類は全てと言ってよい程に生産地が特定され、移入されたものであるのに対し、土師器は地元産であったために、このような数的差が生じたのであろう。

器の器形－56点のうち、塊型6個、細片のため器形不詳1個、高台付坏2個、坏47個で全体の9割を坏が占有している状況である。ところで、土師器や須恵器の坏・塊は、日常生活必需品として用いられている器であって、無文で形が同じような姿をしていて、いわば自他を区別するための表示が当然に必要となってくる。このような際に墨書の有無はこのうえない指標となろう。高台付杯は供膳用具の最も代表的なものであった。墨書を印した器は内黒や糸切り底が極端に多くなっており、これも目印の一つになっているのであろうか。

墨書が印された部位は外面だけのもの24個、底部だけのもの25個、外面と底部の双方にあるもの7個、字体を逆位に付けたもの6と数値的に分類できる。この置き方、利用状況によっての一工夫ではなかろうか。墨書の判読可能なものは10数例見うけられるが、これらを列記し、その意味するところを推察してみる。

・大きさを表示するものとして「大」の字が4ヵ所
・数字を表すものとして「十」の字が2ヵ所、「六」の字が1ヵ所
・方位を表すものとして「子」の字が1ヵ所、「西」の字が1ヵ所
・吉祥を意味するものとして「信」の字が2ヵ所
・地形・地物を表するものとして「田」の字が1ヵ所
・仏教に関する寺の記号として「卍」が1ヵ所
・「太」の墨書土器は山本田代遺跡より出土しており、水田地帯「田代」の地名に関連する「TA」の音の表記と考察する見解もある。
・階位に関する記号として「王」が1ヵ所

なお、判読できないものが多数あるが、今後の資料増加に伴って読めるようになる可能性は極めて高いと思われる。　（飯塚政美）

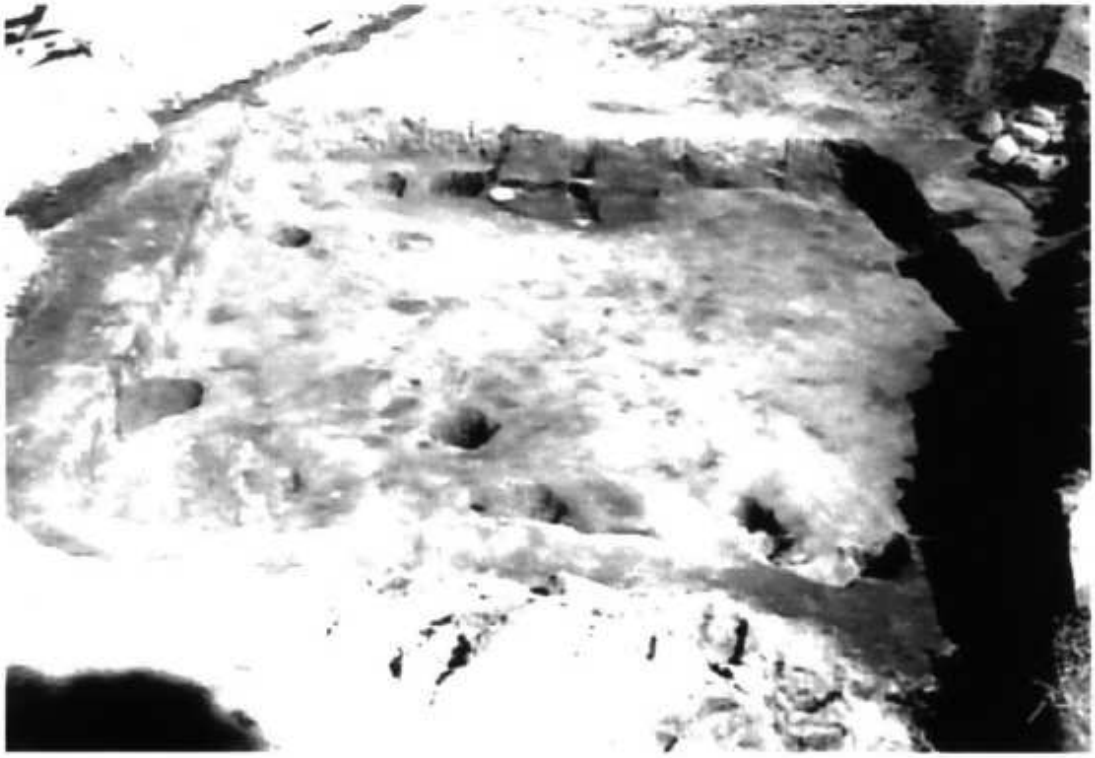
図　　版

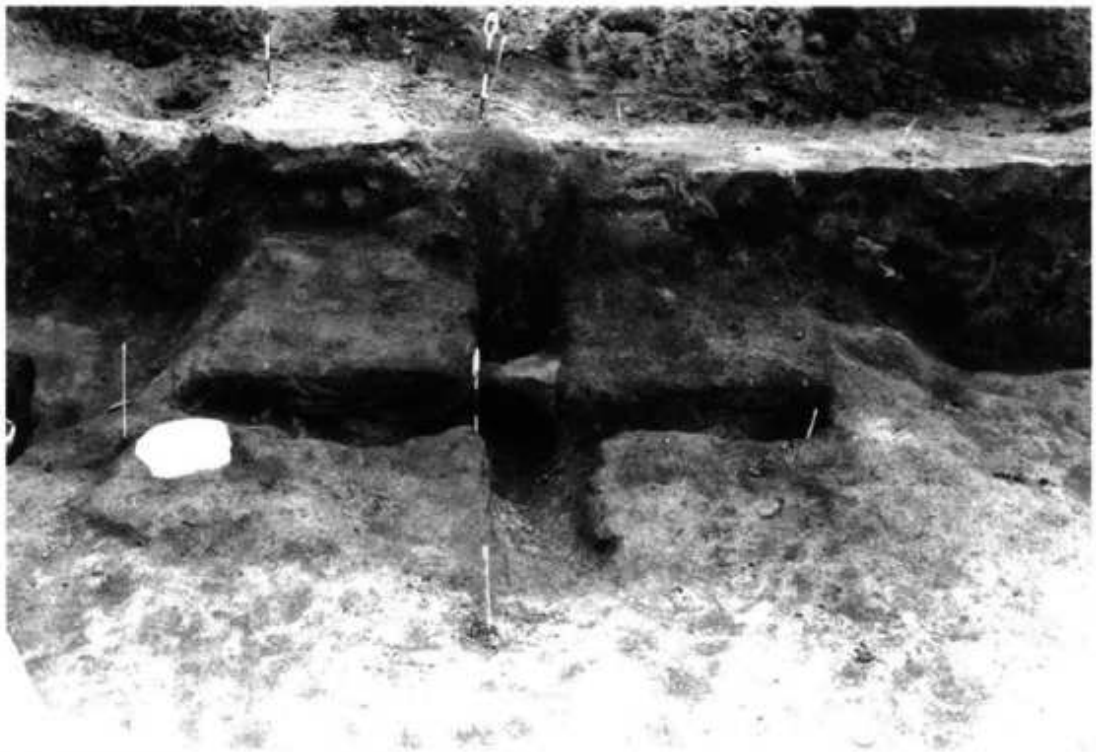
図版1　遺跡遠景

遺跡地を東側より眺む（上）　　遺跡地を南側より眺む（下）

図版2　発掘調査状況

第3号トレンチ（上）西側より　　第1号トレンチ（下）西側より





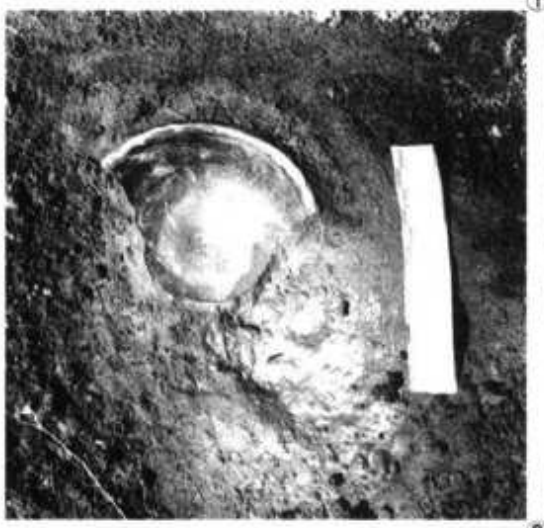
第７号住居址（上）　　第７号住居址カマド（下）

第８号住居址（上）　　第８号住居址カマド（下）

図版5　遺物出土状況

①

②



③

④

⑤

⑥

①～⑥土師器出土状況

図版6　出土遺物

①

②

③

④

⑤

⑥

①土師器（第７号住居址No.97）　②土師器（第７号住居址No.107）
③土師器（第７号住居址No.103）　④灰釉陶器（第７号住居址No.43-2）
⑤土師器（第８号住居址No.B-1）　⑥土師器（第８号住居址No.F）

報告書抄録

ふりがな	つじにしはばいせき
書名	辻西幅遺跡
副書名	県道美篶・箕輪線拡幅工事事業
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書（第II次）
編著者名	友野良一　飯塚政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396 長野県伊那市大字伊那部3050番地　TEL0265－78－4111
発行年月日	西暦1997年3月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ・・・	東経 ・・・	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
つじにしはば 辻西幅	ながのけんいなし 長野県伊那市 てらさわおか 手良 沢岡	163	2529			平成8年 8月6日～ 平成8年 8月26日	100	県道美篶箕輪線拡幅工事事業に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
辻西幅	集落址	平安時代	竪穴住居址2軒	土師器　須恵器 灰釉陶器 土師器墨書	平安時代初期に編纂された「倭名抄」に見られる「弖良郷」の一部か

辻西幅遺跡

── 埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書 (第Ⅱ次) ──

平成9年3月8日 印刷

平成9年3月10日 発行

発行所 伊那市教育委員会

印刷 ㈱小松総合印刷所